

# マジで中身のない話

白ノ宮

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

マジで中身がない話。

このお話が理解できる人は素直にすごいと思います。私ですら「？」ってなっているのです。

平気でクロスオーバーしますし、キャラ崩壊も引き起こします。

この作品が一番配慮という言葉からかけ離れたやつ。

文字数少ないのに不定期投稿とかいう悲しき仕様。

ベース世界は【推しの子】

別版權キャラ出張

【艦これ】予定

# 目次

マジ 中 0 7	マジ 中 0 6	マジ 中 0 5	マジ 中 0 4	マジ 中 0 3	マジ 中 0 2	マジ 中 0 1
21	18	14	11	8	4	1

# マジ中01

私の名前は九重渚。

銀髪碧眼の超絶美少女！

そんな私も今日から高校生。

見た目に全振りしたような私の能力はいかにも残念って感じで、偏差値も『うーん…』ってなるようなところしか受からなかった。

そんな私が入学することになった学び舎の名前は陽東高校。珍しい事に芸能科のある高校で、普通科の偏差値は40！

普通科なのに40だって、40！

入学決まった時は一安心したけど流石にこれはヤバイって落ち着いてから気付いたよ。ね。

でもだからといって塾に通うのは論外。折角高いお金を出して私立の高校に通わせてくれる親にそんな苦勞をかけさせるわけにはいかない！

この事をお母さんとお父さんに話したら両方に鼻で笑われたけど、私は気にしてないもん。

両親「そんな心配しなくても、ウチは余る程稼いでるから余計なこと考えずに人生楽しめば良いのに」(ハイスペック)

だって両親がハイスペックなのに私だけ見た目しか取り柄のないボンクラって嫌だもん！

容姿が凄く優れているという時点で私は間違いなく両親の娘だってわかるけどそれはそれで私がただの馬鹿って事になるから嫌。

そんな訳で当面の間は自分の小遣いの中で参考書を買いつつ、目一杯高校生生活を満喫するっていう目標を立てる事にした。

ここから私の輝きまくる学校生活が始まるんだ！

「よーし、がんばるぞー！ファイト、オー！」

『渚ー、明日早いんだから早く寝るんだぞー』

「わかってるよー..」

気合いを入れるところからお父さんに邪魔されてしまった。

うー！なんか幸先悪いな、こんちきしょう！

そんな感じで呑気に入学式前日を過ごしていたわけで、眠気と格闘した入学式を終えてクラスメイトへの自己紹介の時間がやってきた。

よーし、ここはバッチリ決めるぞー！

そんな意気込みもあるクラスメイトの自己紹介を聞いた途端に消え去った。

「星野愛久愛海です、一年間よろしくお願ひします」

シンプルすぎる自己紹介だったが、名前のインパクトや容姿の整い様が相まって他のクラスメイトの方々に深い印象を刻み付けられたのを確信した。

（なんだよー、あんなの絶対勝てないじゃん。いや、勝ち負けとか無いんだけどさ？）

少し剥れながらも一瞬で感情をリセットして、自分の自己紹介を行う。

「皆さんこんにちは！私は九重渚って言います。特技は料理で、趣味は読書とかゲームとかですっ！皆さんと仲良く楽しい高校生活を送りたいって考えてます♪一年間よろしくお願ひしますね！」

高めのテンションと本物と見間違えうほどのクオリティの高さを誇る作り笑顔で放つ自己紹介は思っていたよりも好感触で、私は一先ず安心カナー？

それにしても星野っていう男子、日本人にしては珍しい金髪だったなあ。

ま、銀髪の話が言うのもなんかおかしい気がするけどっ♪

## マジ中02

性別の壁を感じさせないムーヴでクラスメイトに積極的に話しかけて、知り合い程度に好感度を調整する。

こうしておけば面倒な友達付き合いは最小限に抑えられるし、自由に行動できる。

仲が良い人間が沢山いる上で自由な学生生活を送れるようにしちゃう自分自身が天才過ぎて怖いなあ♪

というわけで初日というだけあって授業は無く、教科書購入を行なってからロングホームルームの後解散の流れとなった。

ここまでの流れで私がまだ話しかけていない人物がいる。その人の名は星野愛久愛海！

キラッキラな名前を付けられた金髪イケメンくんで、恐らく名前関連で弄られたなんて事よくあったんじゃないやなからうかつて感じの男の子。

彼はクラスメイトと交流する気はなさそうだ。

拒絶しているわけでは無いが、自分から話しかけに行く事をしない辺りそんな気がする。



話しかけて欲しい気配はないし、話しかけられても普通の対応する点を考慮して彼はコミュ障ではないことも理解できる。

普通科に舞い降りた芸能科並みのイケメンくんこと星野くんは不思議とクラスメイト女子の話題に上がってこない。

一体何故なんだろうか？

どれだけ考えても現在の空っぽな私の頭では永久の時を使おうとも結論は出ないの自分で考えようとは思わないが、取り敢えず私も交流する事で本人の事を知るところから始めていこうと思う。

あれっ、なんかコレって婚約者のことを一先ず知っておこうとして健気に話しかける許嫁みたいじゃない？

はわ〜！

なんか急に恥ずかしくなってきたよ〜／／／  
って、いけないいけない！

こんな事をしている間に星野くんが教室から出て行っちゃう。私は追うと決めた獲物は絶対逃がさないんだからっ。

気持ちは後がない狩人、或いは40代後半になって周囲が結婚しているのに自分だけ売れ残ってしまったって焦りを感じまくって合コンで相手を捕まえようとする一昔前のレ

デイのような雰囲気は消しとばして、あくまでほんわかした感じで星野くんを駆け寄る。

「星野くんっ♪こんにちは」

私がつつたテンションで話しかけると、星野くんは予想通り普通に対応してくれる。

「ああ、確か九重……だったか。どうしたんだ？」

「えつとね？私、星野くんと仲良くなりたいたいなくって思ってた話しかけたのっ♪なんかね、君を見た瞬間これは運命だーって思ったから連絡先交換しよっ？」

「うん？……すまん、話が見えてこないんだが？」

大丈夫だよ、星野くん！私も自分の言ってる事全然理解出来てないから♪

仲間だねー☆

「もっつ！人の話はちゃんと聞かないとめっ！だぞ☆私が君と仲良くしたいから連絡先交換しようってコト♪どう？理解できたかな？」

「あ、ああわかった。交換しようか」

終始ドン引きした表情が隠しきれないよ星野くん。

でもまあ、こんなのが話しかけてきたら私もおんなじ反応返しちゃうと思うから私と星野くんの友達としての相性はバッチリだぜっ。

類友類友ー☆

「やったっ♪これでいっばい連絡できるね☆」

そうは言っただけど無駄な連絡はあんまりするつもりないから、そんな嫌そうな表情しないで欲しいなっ♪

## マジ中03

なんやかんやあつてアクアくんと一緒に下校する事になった。

ちなみに呼び方については芸能科に妹がいるらしく、星野呼びだと紛らわしいのでアクアと呼んで欲しいと言われた。

とはいえこちらだけ名前呼びというのも何か味気ないので私の事も名前呼びさせる事にした。

余談だが、アクアくんではなくアクアマリンきゅんって呼んでみたら思いのほか睨まれた事を記しておこう。

機嫌が治るまで時間かかったけど、乙女かつ！というツツコミを入れそうになった私を誰か褒めてー！

凄いつ！

ありがとー♪

こんなことしてて虚しくならないのかって？ふっふっふ…、もう慣れたよっ！

慣れると逆に楽しくなってくるから諸君もお試しあれ。

あ、そうそう。

下校ついでにこの高校の中庭も見ていこうという提案をしたら受け入れてくれたので下駄箱から中庭に進路変更！

「よーし、面舵いっばーい！」

「渚、頼むから急に大声出さないでくれ。周囲の視線が痛い……。というより渚って羞恥心ないのか？」

「うわ、ひつどい。流石に私だつて羞恥心ぐらいあるよっ！。人並み以下だろうけど」

「自覚してやつてるなら尚タチが悪いな」

「えへへ、それほどでも♪」

「褒めてはないぞ」

今をときめく高校生同士の悪ふざけつて感じの会話つて凄くハッピーつて感じ♪

中庭

「うっひゃー、学校見学の時とか資料で見た時もあったけどホント綺麗だねーここ」

「そうだな。逆にいえばここしか目立ったセールスポイントがないわけだ」

「うーん、辛辣だねえ。でも同意だよ」

このなんというか、ドラマの学園ものでありそうな中庭は実際にドラマの撮影で使われていたりするらしいので、普通科の中にはそれが目的の子も居るらしい。

なんか勿体無いな。

「あれ、お兄ちゃん？」

と中庭を見て二人してぼーっとしていると女の子の声がこちらに向けられて発せられた。

誰だろーって視界を声の方に向かうと、アクアくと同じような金髪の女の子と桃色の髪をしたダイナマイトを抱えた女の子がそこにいた。

「ね、もしかしてあの金髪の子って？」

「ああ、俺の妹の星野瑠美衣だ」

「ほほー、やっぱりその美貌は親譲りって訳ですかあ？」

「お前も同じだろう？さっき独り言でブツブツ言ってたの聞こえてたぞ」

「乙女の秘密を盗み聞きとは感心しないぞーっ♪」

「お、お兄ちゃんが女の子と仲よさげにしてるっ…!？」

「あれ？妹さん、お兄ちゃんを取られてシヨックって感じ？」

「いや、あいつはそんな事思わない。どうせロクなことではないだろう」

「そっかー。なら別にいつか♪」

いやはや、アクアくんの妹さんってアイドルやれそうぐらい可愛いねー☆  
その隣の子も方向性は違うけどかわいー！

## マジ中04

「それで、お兄ちゃん。その人って彼女さん？」

妹さんがそう言った途端アクアくんは大きな溜息をついた。

なんかその反応はやめて欲しいんだけどな。

私が男性の立場から見てもこんな属性てんこ盛りの女の子は嫌だけどき。本人の前  
なんだからちよつとは隠そうよ！

え？隠す価値なし？

それはそう！

「コイツはクラスメイトだ。ほらっ」

「はいーご紹介に預かりましたっ♪普通科所属の九重渚です☆是非とも下の名前で呼  
んで欲しいな。よろしくねっ♪」

さて反応は…

妹さん：片目がピクピクしており、若干引き気味。

桃色ちゃん：ポカーンとしている。

わお！何故か知らないけど普通科より芸能科の方が反応悪いっ！

アレかな？仕事じゃないと普通の人より反応悪くなるものなのかな？

いや、単純にうちのクラスメイトの反応が良すぎるだけかも…。

「ねー、アクアくん。なんか反応が悪いよー？もしかして体調不良かなー」

「おそらくお前の頭が動作不良を引き起こしてるだけだ。安心しろ」

「そこまでいうかなー…」

「このままじゃ埒があかないので目の前の二人に自己紹介を促した。

「お二人さんの自己紹介を聞かせて欲しいなー♪」

「えっ！あ、うん。私は星野瑠美衣、気軽にルビーって呼んで欲しいかな、よろしくね渚」

「うちは寿みなみ、よろしゅうなー」

ほほう、ルビーちゃんの方は気さくな感じでみなみちゃんは少し控えめな感じと。

「あつ、そうそう。みなみに紹介するね、こっちの根暗陰キヤは私のお兄ちゃん、星野愛

久愛海。アクアって呼んで？」

「ルビー、一言余計だ」

星野兄妹のほのぼのとした会話もいいものだね、平和だなあ。

「みなみちゃんは確かグラビアアイドルだよね？」

「えっ！知ってはるんですか？」

「もっちゃん！以前本屋で見かけた時に可愛くて購入したんだー♪」



「そう言ってくれるとうれしいわあー」

実際の所は胸がおつきくてもっとまじまじと見たいなあっていう邪な気持ちで買ったんだけど、ストレートに伝えると傷つけちゃうだろうから嘘を混ぜとかないとね。

あ、でもみなみちゃんがかわいいって思ったのは本当だよっ！

いつかそのお胸様に顔を埋めてみたいなあなんて思ってたたり♪

「おい渚、なんか変な事考えてないか？」

「むむ？と言うことはアクアくんもなんか考えてたって事ですか？ニシシツ♪やつぱり

類友ですなー、このこのー☆」

「ええい！くつつくな、暑苦しい！」

「渚とお兄ちゃんってなんか距離近い気がするんだよなー…」

「せやなー」

そりゃ私とアクアくんは相性バツチリのベストフレンドですから！

距離が近くなるのもトーゼンっ♪

## マジ中05

よっしや、私だ！

陽東高校普通科の超絶美少女の九重渚ちゃんだヨー☆

今日は学校生活二日目だから折角だし別のクラスのことも交流しておきたいなって  
思って校内を放浪している最中なのさ！

放浪といっても隣のクラスにお邪魔するだけなんだけどね♪

チラッと教室の中を覗く。

まだ二日目であるもののある程度の集まりは出来ており、その中でも少ない人数の集  
まりを狙う。

なんか『狙う』って単語使うと暴力的なことをしようとしているみたいだね、とつ  
ても不思議☆

おゝいるねー♪二人組で話しかけやすそうだよ。

それにしてもこの学校容姿が整っている人多いなあ。本当にここって普通科なのか  
な？芸能科だったりしない？

ま、ここが芸能科のクラスだとしても私がやることは変わらないけどねっ♪

自分のクラスでもないのに平然とした顔で堂々とクラスに入る。

私みたいな銀髪をしている生徒はそうそういないのかすぐ視線が集まるが、私が特に何の動揺も見せないためか、昨日居なかつただけかと勘違いして興味が霧散していく。

結局の所、こういう場合は堂々としていれば大抵どうにかなるのだよ。

私が話しかけようとしているのは女子生徒二人組。

片方は薄めの金髪で碧眼の若干セレブ感が垣間見える子と、もう片方は黒髪で左側におさげとして纏めている子。

交流開始だー！

銀色の長い髪をファサつとして気合を入れてから二人組に話しかける。

「おはようございませす、お二人さん♪」

「おはよーっ！」

「おはよう、君は？」

薄い色味の金髪の子が元気いっぱい挨拶を返してきて、黒髪の子が冷静に挨拶を返してきた上でこちらの事を聞いてきた。

いいね、さらつと自己紹介を促せるのは渾的にポイント高いですよっ♪

「申し遅れました、わたくし九重 渚と申しますわ、気軽に渚とお呼びくださいまし。よ

ろしくお願いいたしますね♪」

「僕は時倉 玲、そつちにいるのが夕館 華亥奈だよ。僕たちのことも下の名前呼びでいいよ。渚、これからよろしく。」

「渚ちゃん、よろしくねー!」

「玲さんに華亥奈さんですね。別クラスですけど仲良くして下さいと嬉しいですわあ♪」

よしっ!なんか私のキャラが盛大に迷走している気がするけど自己紹介を交わしたらもう縁ができたからねっ♪私達は友達だっ!

時倉 玲（ときくら れい）ちゃんに夕館 華亥奈（ゆうだち かいな）ちゃんとお友達になつたぜっ♪

「ん：：?今別のクラスって言った?」

「ええ、言いましたけど。それがどうかいたしましたか?」

「一応聞くけどこのクラス?」

「隣の1ーBですわ。どちらにせよ普通科ですから大した差はありませんのよ?」

「えー!渚ちゃんって別のクラスっぽい!」

「平然とした顔で教室に入ってくるものだから、別のクラスの人だとは思わなかったよ……」

「それでも仲良くしてくださいますよね？」

「うん。別のクラスだからって邪険にする理由は無いからね、改めてよろしく」

「仲良くするっばい！」

「ふふっ、嬉しいですわ♪」

人の良い方達で助かりましたわ。

さて、この口調はいつ元に戻しましょうか。ここまで来てしまうと戻すタイミングがわかりませんわね。

あと、これは余計な一言かもしれないませんが華亥奈ちゃんの語尾も結構特徴的ですね。

## マジ中 06

あの渚口調崩壊事件から数時間が経過しましたわ。

未だにわたくしの口調が治っていない上に、地の文にまで影響が出てしまってますの。

これじゃわたくしが九重渚だと誰もわかりませんわ！

そういえば記し忘れていましたが、昨日からお勉強の方をスタートしましたの。

やっぱり中学の部分がボロボロな訳ですから、そこから勉強し直していますわ。

関係ない事ですが、学ぶ理由が明確ですとモチベーションになりますし、集中力や記憶力も段違いですわね♪

以前ネットの方で散見していた『勉強は嫌々やるのでは効果が薄い』というのは本当でしたのね。

これからは勉強する理由がありますので以前のような醜態は晒しませんわ！

ああ、でも今の社会って学歴だけじゃいい勤め先に恵まれないらしいですわね。

まあ、でもその時はその時ですわっ！

話は戻りまして、授業の方は恐らく中学の範囲の復習でしたわ。正直助かりますけど

高校の授業がこんなので本当に良いんですの？

はっ！これが偏差値40ってヤツ!?

あ、ついでに口調が戻った気がする。

漸くクラスメイトと喋れるよー☆

って事で最初の犠牲者は…

「昼休みだぜい、アクアくん♪一緒に食堂か購買行こうぜい!」

「大人しくなつたと思つたらすぐコレか…!」

折角だしマイベストフレンドのアクアに飛びつくことにしたヨー☆

んもー、こんな美少女が抱きついてるんだからもっと嬉しいがってくれてもいいんだぜ  
?

「んー?胸か、やっぱり胸がないと男子って反応しないものなのかねー?」

「いい加減離れてくれ…!」

私って身長もあんま高くないし、胸もちっちゃいんだよねー。

だから多分大人の魅力ってやつはこのままの状態で大人になったら出せないと思う  
の。

まあ、別に?

身体の魅力じゃなくて、性格的なものでいい相手みつけるから問題無いし?

一生独り身つて人も最近増えてるみたいだから見つけられなくても問題ないしー！  
にしてもアクアくんの反応が昨日より薄いな。もしかして昨日のうちに…

「アクアくんって昨日の放課後に童貞卒業したの？」

「ブツ！…いきなり何を言いだすかと思えば、どうしてそう思ったんだ？」

「あれ、違った？なんか昨日より反応が薄いから女性関連の事でインパクトの大きいイベントを通過したのになって思ってたさ♪」

「それで、童貞卒業…と？」

「Yes！その通りだよ、少年…で、そこんとこどうなのさ？」

「そんな訳無いだろう…。どうしたらそんな突飛な発想になるのかわからないが、兎に角今は昼休みだ。さっさと購買行くぞ」

「あつ、ちよつと置いてかないで〜！」

こんなやり取りをしているものだから、1—Bでは「アイツら絶対付き合ってるよな」と高校生活始まって早々噂されているのであった。

尚、アクアはそれに気付いているが、噂はすぐ消える物では無いので諦めている。



## マジ中07

ヤッホー！

お昼休みな九重渚だよっ♪

今はアクア君と一緒に購買で何を買うか迷っている最中なんだー☆

「やっぱり購買が混んでるっていうのはフィクションなんだねー♪」

「いや、単に俺らが遅れたから混雑している時間帯では無くなったただけだろう」

「あつ、だから品数が少ない訳だ！アクア君頭冴えてるー♪」

「渚の頭が足りてないだけ……なんか前にもこんなやり取りしなかったか？」

「デジャヴってやつでしょ。じゃ、私はあんパンと梅握り二つにしまーす！ほらアクア

君も選んで選んで！」

「選ぶって言ったって大して残ってないだろうに……。俺も同じのにするか」

「おっと!?!私とお揃いですかー♪」

「変な事考えるなよ」

「んー☆どうだろうなあー♪」

最早恒例となっているやり取りをしながらお昼ごはんを購入した。

「どこでお昼にしようかー♪」

「普通に中庭でいいだろう。大抵の生徒は食堂かカフェテリアに行っているはずだ。あそこもこの学校のセールスポイントだからな」

「おついいねー☆テーブルセットもあるし、そこで食事してる人達も誘って友達の輪を広げようー!」

「なんでお前はそんなアクティブなんだ?」

「逆になんでアクア君はそんな消極的なのさ。だって人生はたった一回きり、なら悔いのないようにしたいって思うのは当然でしょ??」

「人生は一回きり… か…?」

「あれ?私もしかしてなんか地雷踏んだ…?」

「いや、なんでもない」

なんでも無いって言ってた割に表情暗いぞー?

「人生は一回きり」ってどこに反応してたよね?

って事はアクア君って人生2回目だったたりするってコト!?

ま、そんな訳無いよね!

中庭に出るとアクア君の予想通り人はあまりおらず、テーブルセットがたくさん余っていた。

ちなみにテーブルセットには大きめの屋根が付いていて、雨が降っても濡れないようになっている。なんかお金かけるとこ違くなーい？

私がテーブルセットに疑問を込めた視線をぶつけているとあらぬ方向から刺客が出てきた。

「あつ、お兄ちゃんと渚だ」

「ほんまやー」

いや、ルビーちゃんとみなみちゃんは良いんだよ。問題はこの後である。

「渚ー！さつきぶりっぽいー!!」

「折角だし一緒にどうだい？」

玲と華亥奈がいたのである。

あー… 私だけだったら問題なく行けるんだけど、ここには星野兄妹とみなみちゃんがいるしなあ…。

そこで私はあることに気付いた。

これまで私はイカれた行動をこの人たちの前でやってきた。つまり、口調を変えたところで「ああ、またいつものか」って流してくれるんじゃないかということに。

よし、そういうことなら問題無し！

「ふふっ、お二人ともさつきぶりですわねっ♪」

「「えっ…？」」

何故か反応しちやっってるんですけど、なんで流してくれないのん？